

令和5年度（2023年実施）大学入学共通テスト「国語」について

1. はじめに

周知のとおり、令和3年度のセンター試験から共通テストへの移行にあたっては、特に設問形式に大きな変更が加えられた。それは主に、大学入学時点で必要とされる能力が修正されたことを受けてのものである。

大学入試センターがそのHP上で公開している資料によれば、共通テストで新たに測ろうとしている力とは、「知識の理解の質」、「思考力、判断力、表現力」のことである¹。国語という科目においては、「言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める」とされているが、これは上記の「思考力、判断力、表現力」の内容を国語の文脈で言い表したものであると考えられる²。

考察すべき点は多々考えられるが、本レポートでは、国語の共通テストが本当に出題者の考える「思考力、判断力、表現力」を測るのに適したものとなっているのか（＝妥当性）、という点に絞って、主に令和5年度の共通テスト本試験について意見を述べる。以下では、この「思考力、判断力、表現力」を、「多面的・多角的な視点から解釈する力」と「目的や場面等に応じて文章を書く力」にわけて考察する。

2. ポイント解説

2. 1 多面的・多角的な視点から解釈する力

共通テストの出題形式のなかでとりわけ特徴的と考えられるのは、複数の題材を含む多様な素材を扱っていることである³。それらの素材が提供する多面的・多角的な視点からの情報を、受験者が相互に結び付けて考察しながら解くような設問を設定することによって、「思考力、判断力、表現力」を測ることが目指されていると考えられる。

ここ6年間の試験で使われた素材の推移は、以下の表1の通りである。

¹ 大学入試センター「令和5年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」。

² 同前。

³ ここで「題材」とは、各大問の冒頭で提示される素材文のことを指す。一方で「素材」は、冒頭の「題材」のほかに、各小問のなかに出てくる「資料」「会話文」「メモ」「ノート」「図表」といったものを含んだ言葉として使用している。これらを一括して「素材」として扱うのは、設問を解くにあたってその内容や視点を理解しなければならない対象であるという意味では、区別を設ける必要がないからである。

表1 過去6年間の素材使用の推移

	センター試験						共通テスト					
	H30		H31		R2		R3		R4		R5	
	本	追	本	追	本	追	1期	2期	本	追/再	本	追/再
複数題材							4		1 3 4		1 4	4
資料 (小問中に示された素材文を含む)							1-5 2-6 3-5	4-7		2-6 3-4 4-5	2-7 3-4	2-7 4-6
会話文	1-3	1-4	1-5	1-5	1-5	1-5		1-6 2-6	3-4	2-6	1-6 3-4	4-6
生徒作成物 (メモ・ノート等)							1-5		1-6 2-5	1-6	2-7	1-6 3-5
図表	1				4-3							
合計数	3		2		3		8		11		13	

たとえば「1」は「第1問」、「1-5」は「第1問-問5」を示す。

表1を一見してわかる通り、共通テストに変わってから、使用する素材の数が顕著に増加している。この点は共通テストの問題作成方針にかなっているようにみえるが、真に考えるべきは、それによって本当に「多面的・多角的な視点から解釈する力」を測れる設問が作れているか、ということである。この点を、今年度の本試験の問題から考えてみよう。

まず、【第1問-評論】では、建築家コルビュジエの建築に関する【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の2つの評論文が題材として提示され、問6の会話文の空欄補充問題のなかでそれらの関連性を考える力を測ることが企図されていた。問6の(i)では、同じコルビュジエ建築の窓の効果について、それぞれの題材の強調点を比較させる設問となっている。その後、(ii)で【文章Ⅰ】で正岡子規を取り上げた意味を考察させ、(iii)では(ii)で考察した意味を踏まえ、それが【文章Ⅱ】との関連のなかでどのような意味を新たに持ちうるかを考察させている。したがって、問6は確かに2つの題材の内容を比較、または総合しなければ解けない問題となっており、その意味で問題作成方針にかなう設問となっていたといえることができる。

次に【第2問-小説】では、梅崎春夫「飢えの季節」を題材とし、問7で【資料】と生徒の【構想メモ】、そしてそのメモを元に作成された【文章】が素材として使われた。設問は【文章】中の空欄を補充する問題である。問7(i)は、【資料】中の広告が戦後の物資不足という状況を表すものと捉えた上で、この広告と題材「飢えの季節」の本文中に出てくる「焼けビル」の共通点を答えさせる問題であり、(ii)は【資料】および(i)の共通点を

踏まえた上で、本文最後に出てくる「かなしくそそり立っていた」という「焼けビル」が何を象徴しているかを考えさせる問題であった。(i)については、【資料】における戦後の物資不足という「視点」を本文の考察にかけ合わせた上で、戦時下の事物が戦後も残りつづけていたという共通点(＝正解選択肢③)を引き出す問題となっているため、問題作成方針に沿っているといえる。(ii)についても、(i)で引き出された戦争の「持続性」ないし「残存性」をベースにして、「かなしくそそり立っていた」という「焼けビル」が象徴するものを解釈させているという点で、同じく問題作成方針に沿っているといえるだろう⁴。

【第3問－古文】では、題材の『俊頼髓脳』に対し、問4で『散木奇歌集』の一節とそれに関する「会話文」が使用された。設問形式は、【評論】や【小説】と同様、会話文中の空欄補充問題である。しかし、会話文の内容は、2つの素材文を「掛詞」という観点からそれぞれ独自に考察するものであったため、問4(i)は『散木奇歌集』の内容のみ、(ii)と(iii)は『俊頼髓脳』の内容のみに関する設問となっていた。つまり、複数の視点を比較するという構造の設問にはなっていなかった。

もちろん、「会話文」中で「掛詞」という観点を導入することによって、それぞれの素材文のより深い理解を求める設問にはなっていたため、本問は知識を基にした「思考力」を測る設問の一つとして適切であったとはいえる。ただ、このような力は従来のセンター試験でも測ろうとしてきたものであるため、この問4で、共通テストが新たに求める力を十分に測れているかどうかには疑問符がつくといえるだろう。

【第4問－漢文】では、白居易が官吏登用試験に備えて作成した【予想問題】と【模擬答案】の2つが題材とされている。しかし、両者が同一人物によって書かれたものである上、【予想問題】はわずか2行の長さしかないため、これを複数題材の提示と考えるのは無理があるだろう。評論文や論説文では、自ら問いを設定したり、想定される反論を記したりした上で、自らそれに答えるという叙述形式は極めて一般的であり、この【予想問題】と【模擬答案】も質的にはそうした叙述と同種のものと考えられる。

そのほか、今年度本試験の【漢文】では小問中に何らかの素材が使われるということもなかった。したがって、今年度の本試験【漢文】には、「多面的・多角的な視点から解釈する力」を意図した設問は、明示的にはみられなかったといってよいだろう。

2. 2 目的や場面等に応じて文章を書く力

文章を書く力を測るのであれば、実際に文章を書かせる記述式の問題を設定するのが最も適切であるが、その試みは共通テストにおいては現在のところ頓挫したままである⁵。

では、現在の共通テストは、マーク式の問題だけでどのように「目的や場面等に応じて文章を書く力」を測ろうとしていると考えられるだろうか。

⁴ ただし、(ii)については、積極的に正解選択肢②を選ぶためには【資料】などが必要だが、消去法でよければ本文だけで解くことは可能である。選択肢②以外の選択肢はすべて、本文の内容に合致していないからである。

⁵ 文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」, 2021年。

これまでの共通テストに対する問題作成部会の見解をみる限り、この力を測ることを明確に想定した問題として設定されているのは、「生徒作成物」の語句や表現を修正する問題である⁶。この問題は今年度の本試験には出ていないが、昨年度の追・再試験と今年度の追・再試験の【第1問—評論】で出題されている。

たとえば今年度の追・再試験の第1問—問6は、「文章を書く上での技術や工夫」について生徒が作成した【文章】を推敲するという場面設定のもと、【文章】中の表現よりも適切な表現を選択肢から選ばせるという問題が出題された。これは、とりわけ「表現力」を意識した設問と考えてよいだろう。もちろん、結局は答えを選択肢から選ばせるという意味では、本来の純然な「書く力」を問うことはできていない。また、今年度の追・再試験の問題は、それを解答するために必要と考えられる力が、従来センター試験でほぼ毎年出題されていた、「文章の表現に関する説明として最も適切なもの」を選ぶ問題とあまり変わらないようにもみえ、新奇性に欠けていた。しかし、マーク式という客観選択の設問形式のなかで、受験生の「表現力」ないし「書く力」を測るための一つの可能性としては、この「表現の修正」という設問形式は工夫次第で適切な問題となりうるのではないかと考える⁷。

もう一点、「書く力」を測ることにかかわる可能性がある設問形式として、空欄補充問題を考える向きもあるだろう。以下の表2は、過去6年間における、「会話文」や「生徒作成物」中の空欄補充問題の推移である。

表2 過去6年間の空欄補充問題の推移

	センター試験						共通テスト					
	H30		H31		R2		R3		R4		R5	
	本	追	本	追	本	追	1期	2期	本	追/再	本	追/再
空欄補充問題	1-3				1-5		1-5	2-6	1-6 2-5 3-4	2-6	1-6 2-7 3-4	3-5 4-6
合計数	1		0		1		2		4		5	

たとえば「1-3」は「第1問—問3」を示す。

表1と同様、こちら共共通テストに変わってから増加傾向にあることがわかる。しかし、この空欄補充問題の増加は、問題作成方針のなかの「学習の過程を意識した問題の場面設定」という方針に沿わせることの影響であると考えたほうがよいだろう⁸。この方針によって、

⁶ 大学入試センター「令和4年度 問題評価・分析委員会報告書（追・再試験）」。

⁷ ただし、その場合にはこうした設問を長文読解の大問中に含めることの是非を考える必要が生じるかもしれない。問われる力が文章技術に関するものになればなるほど、本文の内容理解とは離れていってしまうからである。

⁸ 大学入試センター「令和5年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」。本レポートは共通テストで新たに重点的に測ろうとしている「思考力、判断力、表現力」に焦点をあてているため、「場面設定」の是非に関する議論には触れない。

各小問中における教師と生徒の「会話文」や「生徒作成物」が増加したことを受け、それらの素材を扱うのに適切な設問形式として空欄補充問題が図らずも設定されたのであって、必ずしも「目的や場面等に応じて文章を書く力」を測るために意図的に空欄補充問題が設定された訳ではないと思われる。

むしろ、設問形式が空欄補充であるかどうかよりも、設問の場面設定が「学習の過程を意識した問題の場面」になっているかどうかのほうが、相対的に「書く力」を測ることにかかわってくるのではないかと考える。たとえば、今年度本試験【第2問—小説】の問7では、生徒が【資料】を考察して【構想メモ】をつくり、それをもとに【文章】を書くという場面設定がされていた。これによって、文章を書くまでの過程や方法といった、「書く力」に含まれる要素が設問内に組み込まれていたと考えることはできる。

とはいえ、こうした場面設定を用いることで測れるような「書く力」は、実際に自分の頭で論理を組み立て、書く内容を取捨選択し、文章の規則を守ってわかりやすく書くといった純然たる「書く力」とは程遠いものというべきである。

3. まとめ

令和5年度（2023年実施）の大学入学共通テスト本試験「国語」では、総じて昨年度の本試験の設問形式を踏襲する傾向がみられた。そのため、これまでの共通テストの結果から、共通テストの設問形式が昨年度の時点である程度の目標とすべき水準に到達したと、出題者側が判断したようにもみえる。

しかし、これまで述べてきたことを踏まえれば、これからの時代に必要だとされている「国語」の力を測るためのものとしては、現在の共通テストにも改善すべき点はまだ残っているといえるだろう。この点はおそらく出題者側も共有している問題意識であると考えられる。だからこそ、令和7年度からの新課程に対応した共通テストでは、複数の資料を読み解いて答えるような大問を新たに追加することを検討しているのだろう。

学科的な知識や技能といったコンテンツの習得だけでなく、それらを望ましい目的のために使いこなすためのコンピテンシー（≒「生きる力」）が求められることは、情報化やAI、VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）といった言葉に特徴づけられるこの時代にあっては、抗しがたい潮流というべきである。もし、この時代の変化のなかで、共通テストがより積極的な役割を果たしていこうというのであれば、そのテストのあり方については、今後とも不断の改善と検討を重ねていくことが必要だろう。引き続き、その動向をしっかりと注視していきたい。

以上

参考資料

- ・大学入試センター「令和5年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」。
- ・文部科学省「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」，2021年。
- ・大学入試センター「令和4年度 問題評価・分析委員会報告書（追・再試験）」。